

「ジマ市のチェシヤ財団障害児支援センターに対する障害 児用中古車椅子供与計画」事業完了報告(写真)

チェシヤ財団ジマ活動拠点訪問－平成25年12月8日

ジマ市は首都アジスアベバから陸路で7時間の距離にある、大学のある若者の多い市で、チェシヤ財団の事務所は市のはずれの静かな地域にある。



チェシヤ財団の事務所



敷地内にある工房

車椅子はチェシヤ財団の一室に保管されており、引き渡しに備えての開梱作業が行われていた。

チェシヤ財団建物内の工房では車椅子の修理のほか、足の不自由な人が手で運転するトライ・サイクルの製造や、スチール製の松葉杖などを製造し、障害者の人たちに寄贈している。ただ、殆どの部品が輸入品で、高コストが悩み。

ジマ市での車椅子引き渡し式 － 12月9日

会場 : ジマ・セントラル・ホテル

出席者 : ジマ市関係者、地区責任者、身体障害者協会、NPO団体幹部、CBR幹部、チェシヤ財団幹部、障害児代表と関係者 58名を含む計 114名。

アト・ケダル・モハメッド、ジマ市労務社会福祉責任者、ゴベナ・ケベデ、チェシヤ財団会長の車椅子寄贈への感謝のスピーチに続いて、小田理事がスピーチ後、スライドで今回のプロジェクトに協力をしてくれた「日本の支援学校や子ども達の父兄」「ボランティアの皆さん」「日本政府、外務省の支援」などを約40枚の写真で紹介した。チェシヤ財団のケダル・モハメッド理事長は外務省支援をはじめ「日本のお母さん方の善意」に対して特に感謝を強調した。



子ども達への車椅子の配布

式後車椅子適合性を確認して子ども達に引き渡された。



床に座っている足の不自由な男性と奥の車椅子の男性は身体障害者協会幹部



車椅子を受け取った児童宅を訪問 — 12月10日

1. Gemechis Sultan 男児 9歳 (写真左下)

訪れたときに庭先で日光浴の最中。同行したチェシヤ財団のスタッフも「朝の日光浴は骨の成長には欠かせない」とコメントをしていた。



2. Genet Hailu 女児 15歳 (写真右上)

学校に行っていて留守。その後、彼女の通っている学校を訪問し、先生のご好意で休み時間に面会し、車椅子に乗るのが楽しい、との言葉を聞く。写真は贈呈式に母親と出席していた時のもの。左の松葉杖の男性は身体障害者協会会長。

3. Mekdes Asifa 女児 16歳 (写真左下)

車椅子は翌日受け取ることになっていた。「父と弟と3人で妹の世話をするのに車椅子が来ると楽になる」と姉が楽しみにしていた。



4. Mariama Abawari 女児 17歳 (写真右上)

8歳の時に発病し、8年間の入院生活をしたそうだが、将来の自活を目指しての積極的な姿勢が特に印象的。すでにレース編みは得意で近所でも評判。

チェシャ財団との会談 — 12月11日

ジマから陸路で7時間、アジスアベバに戻り、チェシャ財団の事務所で、今回の寄贈と今後の保守管理、将来の要望などについて、ケダル・モハメッド理事長とアテム・マル、プログラムマネージャーと会談。一年後のモニタリング報告提出の確認をした。

財団は次回の寄贈を強く希望。次回はデシー(Dessie)地区の子ども達に供与したい、また車椅子だけでなく、補装具等もジマとデシーそれぞれに配布したいので出来るだけ多く送ってほしい、と具体的な要望を受けた。



チェシャ財団の事務所